

# ナポレオン戦役から第一次世界大戦へ

——トルストイの読者プルースト——

坂 本 浩 也

プルーストが19世紀文学から継承した遺産は膨大かつ多様であり、フランス文学はもとより、イギリス文学やロシア文学も無視できない。ここではトルストイとの関係を再考してみたい。とりわけ『戦争と平和』と『失われた時を求めて』とを重ねあわせるようにして再読することには、プルーストと戦争のかかわりを理解するうえでも意義があると思われる。前者は、1812年のナポレオン軍によるロシア遠征を半世紀後にとりあげた戦争文学の古典であり、19世紀を代表する大河小説である。かたや20世紀文学の可能性を切り開いたとされる後者の最終篇『見出された時』は、1914-1918年の大戦下のパリ社会をリアルタイムで描いたという意味で、知られざる戦争文学、戦時文学である。一世紀の隔たりを越え、二つの戦争、二篇の小説は、どの地点で、どのくらい重なりあうのか。戦争と戦争のあいだ、小説と小説のあいだで、なにが継承され、いかなる断絶が起きているのか<sup>1)</sup>。

たしかに、戦争という観点から二人の作家を比較するという問題設定は、必ずしも自明ではない。まず、現在刊行されている書簡や資料を読むかぎりでは、プルーストが大戦の衝撃を受けとめて小説に組み込もうとする際に、特に『戦争と平和』を参考にした形跡は見当たらない。戦時中の書簡にかぎれば、トルストイの名はせいぜいロシアを代表する（尊敬に値する）作家の一人として挙げられる程度である<sup>2)</sup>。これまでの研究を見ても、長いあいだ、トルストイの影響はプルーストの青年時代特有のものと思われ、『楽しみと日々』に収録されている初期作品に限定される傾向があった。他方で『失われた時を求めて』の構想と執筆においては、もう一人のロシアの文豪、ドストエフスキーの影響が強調されてきた。ところが近年、比較文学の観点からプルーストを論じているフィリップ・シャルダン<sup>3)</sup>は、『戦争と平和』の“記憶のよみがえり”が、作品のフィナーレの主要な特徴のいくつかと無縁ではないことは確かである」と断言し、今後

の研究のための道筋を整理して提示している<sup>3)</sup>。本稿では、シャルダンの示唆をより詳細に検討しつつ、さらに新たな読解の展望を提示することによって、プーレストが20世紀最初の大戦期に、19世紀を代表する戦争小説をどのように書き直し、再創造したのかを示してみたい。

## 論敵としてのトルストイ

19世紀と20世紀を代表する二作品を比較する前に、プーレストが43歳年上のトルストイの著作をどのように読み、どのような反応を示したのか、歴史の流れにそって確認しておく必要がある。ときおり手紙のなかでさりげなく言及される場合にくわえ、プーレストが明示的にトルストイを論じた短い文章が三篇、草稿として残されている。ロシアの文豪が当時のフランス文学界に及ぼしていた影響力の大きさを物語ると同時に、プーレスト個人の持続的な関心を示す証拠である。遠くから深い敬意を抱きつつ、異論を表明することもあった受容過程の変遷を整理しておこう。

最初の文章（無題）は、1894年に書かれたと推定される。この年、プーレストは23歳。すでに「イワン・イリッチの死」のような複数の短篇にくわえ、おそらく『アンナ・カレーニナ』は読んでいたと思われるが、現行の書簡集を見るかぎりでは、まだ『戦争と平和』の世界に浸った気配はない<sup>4)</sup>。露仏同盟の結ばれたこの年、トルストイは『キリスト教精神と愛国心』と題する小著を発表し、愛国心の発露を痛烈に批判した。プーレストは、この論争の書に反駁しようと試み、短い論文を——おそらくは新聞雑誌に投稿するつもりで——執筆したのである。トルストイの論旨を要約すると、愛国心とは「愚かしく不道德な」感情であり、崇高でもなければ自発的でもなく、ただ統治者が、戦争を引き起こして「みずからの野心的で利己的な狙いを実現する」ために、作為的に民衆に吹き込む感情にすぎない。このような統治者の愛国心に対立するものとして、社会主義こそが民衆のあいだに次第に着実に浸透している。これがトルストイの主張である<sup>5)</sup>。

このような主張は、若き日のプーレストにとって受け入れられるものではなかった。かくして敬愛する大作家は反駁すべき論敵となる。プーレストは、トルストイの主張に自己矛盾があることを論証しようと試みる。まさにトルストイの標榜するキリスト教道徳の立場から、愛国心と戦争を擁護しようとするのである。第一に、トルストイが推奨している社会主義は、富裕層の立場としては利他的だが、貧困層の立場としては利己的なも

のではないかとプーストは言う。つまり、トルストイの図式——愛国心は支配階層の利己主義（不道德）であり、社会主義は民衆の利他主義である——を転覆させようとする。こうして社会主義から距離をおいたうえで、愛国心は「利己的な本能を利他的な本能へと従属させる」<sup>6)</sup>と、彼は断言する。さらには、戦争においても、憎しみあうことなく、ただ「義務として」闘う場合は、ある種の「道徳性」があると述べる（逆に、義務として暴力を振るうという、まさにそのことがトルストイを憤慨させるのだが）。最後にプーストは、正義と隣人愛の名において、社会主義を退ける。社会主義はこのとき秘かに、アナキズムとその暴力性に同一視されていると言える。

この最初の文章において、若き日のプーストはトルストイを論敵と見なし、「無私無欲の源」<sup>7)</sup>としての愛国心という理想を肯定しようと試みている。しかし、フィリップ・シャルダンが指摘したとおり、20年あまりの歳月が流れ、大戦中に書かれることになる『見出された時』の一節においては、このような立場は問いに付される。戦争は、恋愛や家庭における個人の諍いと同一視され、愛国心は、無私無欲どころか、利己的な盲目性の源として批判的に描かれるのである<sup>8)</sup>。結果的にプーストは、トルストイの社会主義的な愛国心批判とは別の経路をとり、むしろ情念論的な——おそらくアランと近い——観点から、愛国心の批判に到達すると言える<sup>9)</sup>。しかし、ある種のトルストイ的な反戦思想のこだまが、『見出された時』のなかに聞き取れるかもしれない。そのことについてはもう少し先で考察する。

## 模範、分身としてのトルストイ

第二の文章は、1906年にトルストイが発表した別の論争的な著作、今度はシェイクスピアに対する攻撃の書についてのアンケートに対する回答の下書きであり、世紀転換期のフランス言論界におけるトルストイの存在感とプーストの反応のよさを物語る一例だが、戦争と小説という本稿の問題設定に関連する要素には乏しい<sup>10)</sup>。むしろ第三の文章のほうが興味深いため、より詳細に検討することにしたい。このときトルストイは、もはや論敵ではなく、プーストの模範であり、さらには分身の役割を果たすことになる。

第三の文章は『失われた時を求めて』の出発点となった『サント＝ブーヴに反論する』のための草稿帳のうちの一冊、カイエ25に含まれる断章

であり、真の意味で批評的なトルストイ論の試みと呼べる。カイエ 25 全体の執筆は、おおまかに 1909–1911 年に位置づけられる。この断章に限れば、1910 年 11 月 20 日のトルストイ死去の知らせを契機に、一種の追悼記事として、あるいは一連の追悼記事への反応として、執筆されたと考えられることも可能であろう。ただし、トルストイの死への明示的な言及は含まれない点を考えれば、それ以前の時期に書かれたと見なすべきかもしれない<sup>11)</sup>。いずれにせよ、この草稿を読むことにより、当時の文学的論争のなかで、ブルーストがいわば共通の敵を前にして、ロシアの文豪に自己同一化していたことが確認できる。まず断章の冒頭を引用しよう。

今、バルザックをトルストイよりも上におく人がいる。狂気の沙汰だ。[中略]バルザックは偉人の印象を与えることがある。トルストイにおいては、すべてが当然のごとくバルザックより偉大である。まるで象の糞と山羊のを比べるようなものだ。<sup>12)</sup>

この草稿の執筆時期を厳密に確定するのは難しいが、トルストイの死の翌日にポール・ブルジュエが『エコー・ド・パリ』紙に発表した追悼記事と読み比べてみると、興味深いことがいくつか確認できるため、以下、複数の視点から検討してみたい<sup>13)</sup>。当時、保守派の論客として影響力を誇っていたブルジュエは、ロシアの文豪が比類なき「観察力」と「喚起力」によって、見事に登場人物を書き分け、感情や風景を描き出したことを礼賛しつつ、いくつかの欠点を正面から非難する。第一に、小説の「構成」が欠けていること。よく知られているとおり、ブルジュエの考える小説の構成は演劇を理想とするものだが、トルストイの小説は、その枠に到底おさまるものではない<sup>14)</sup>。第二に、「原因をつかむ感覚」が欠如していること。ブルジュエに言わせると「個人は社会によって決定される」が、トルストイは社会的な「決定作用」を理解していない。興味深いのは、この二つの点いずれにおいても、ブルジュエがバルザックをトルストイより優れた作家と見なしていることである。ただし、具体例として題が挙げられているのは、『独身者の暮らし [ラブイユーズ]』のみであり、おそらくバルザックの長篇作品の大半がブルジュエの主張する小説の理想像にあてはまらない以上、この比較はいかにも恣意的である（ほかに、トルストイの評価を相対的に低下させるための比較対象として、モリエール、シェイクスピア、スコット、ジョージ・エリオットを賛美している）。

要するにブルジェはトルストイのことを、個人主義者ないしアナキストであり、観察者としてはすぐれているが、一般化したり構成したりすることのできない作家、「極端な印象主義」<sup>15)</sup>の代表として、政治と美学の両方の観点から断罪しているのである。このようなかたちでトルストイの観察眼を強調しつつ批判したのは、ブルジェが最初ではない。じっさい、問題の追悼記事のなかでは、メルキオール・ド・ヴォギユエの言葉が引用されている。『『戦争と平和』は大全である。人間が織りなすスペクタクルのすべてに関する作者の観察の集大成である。』<sup>16)</sup>一見すると賛辞だが、この裏には大きな留保が隠されている。トルストイは「生の諸現象」にかかわる詳細な研究には優れた才能を発揮するが、その「一般的な関係」を認識したり、「関係を司る法則や、到達できない原因まで遡る」ことを目指したりすると混乱してしまう、というのが、ヴォギユエの有名な著作『ロシア小説』の主張なのであり、ブルジェはそれを反復しているのである<sup>17)</sup>。ここで指摘したいのは、まさにそのようなトルストイ批判に真っ向から反論することが、プルーストのカイエ25の断章の狙いだということだ。

この作品〔トルストイの作品〕は、観察ではなく、知的な構築の作品である。観察にもとづくと言われる特徴ひとつひとつは、単に、小説家が引き出した法則、理性的ないし非理性的な法則の、外装、証拠、例なのである。<sup>18)</sup>

明らかに、ここでプルーストが擁護しているのはトルストイだけではない。トルストイを通して、彼自身の美学的な立場——よく知られた1914年2月のジャック・リヴィエール宛書簡によると、『失われた時を求めて』はひとつの「構築物」<sup>19)</sup>である——を提示し、細部の観察偏重という批判にあらかじめ反論しているのである。

このように、ブルジェの追悼記事は、カイエ25を執筆していた時期のプルーストにとって、トルストイがいわば分身としての役割を果たしていたことをより明確にする手がかりとなる。この記事がさらに興味深いのは、トルストイの「構成を欠いた」小説を形容するために、ブルジェが映画（シネマトグラフ）の比喩を用いていること、そしてその比喩が、プルーストの『見出された時』で使われる比喩と類似しているということだ。ブルジェはこう述べる。

『戦争と平和』と『アンナ・カレーニナ』、続けようと思えば際限なく続けられ  
そうなこれらの物語のなかでは、出来事がまるで映画のなかの映像のように  
次々に生じる。進展もなく、展望もなく、全体のプランもない。場面は、おな  
じ光のなかで繰り返され、どんなに些細な起伏も、すべて等しく重要なもの  
として際立たせられる。<sup>20)</sup>

映画はここで、アナーキーと「構成の欠如」の同義語となっている。プ  
ルーストの用いる映画の比喩と比較するため、あまりにも有名だが『見出さ  
れた時』の一節を引用しよう。

われわれが現実と呼ぶものは、われわれを同時にとりまく感覚と回想とのあい  
だにある何らかの関係である——この関係は単なる映画的な視覚によっては抹  
消されてしまい、かくして映画は真実限定すると標榜すればするほど真実か  
ら遠ざかる——。この唯一の関係を、作家は再び見出し、関係をつくる二つの  
異なるタームを、永遠に己の文章のなかに繋ぎ止めなくてはならない。描写のな  
かでは、描写する場所に存在している対象を、際限なく次々と提示してもかま  
わないのだが、真実はただ、作家が二つの異なる対象をとりあげ、両者の関係  
——芸術の世界にあって、科学の世界における因果関係の法則に似た関係——  
を措定し、両者を美しい文体の必然的な円環のなかに閉じ込めるときにしか始  
まらないのである。<sup>21)</sup>

たしかに、プルーストがここで論じているのは小説全体の構成ではなく、  
厳密にはむしろ文における描写の技法であり、マクロ構造ではなくミクロ  
構造である。それでもやはり、カイエ 25 の断章でトルストイの小説にお  
ける「知的な構築」と一般的な「法則」への関心を擁護したのと同じよう  
なやり方で、この『見出された時』でもまた、プルースト自身の文学的な  
企てが定義され、正当化されているのは明らかである。文学とは「真実」  
の探究であり、文学の真実は「科学の世界における因果関係の法則」に等  
しい一般性と必然性をもっている。そのことをプルーストは、ブルジェ  
の用いた映画の比喩の矛先を変えながら主張しているように思われるの  
だ。トルストイの小説もプルーストの文体も、ともに（ブルジェの考え  
る）映画に比較されうのような無秩序なものではなく、科学に匹敵する知  
的な営みの成果だというのである。ブルジェの追悼記事は、カイエ 25  
のトルストイ論断章と『見出された時』の映画の比喩の特権的な発想源で

あるとは断定できないまでも、プルーストが、トルストイの敵をみずからの仮想敵として、自己弁明から自己定義へとつながるレトリックを組み立てていることを示唆する貴重な文献である。トルストイの小説を論じることは、プルースト自身の小説観を提示することだった。そのことを確認したうえで、カイエ25のトルストイ論については先で立ち戻ることにして、いったん第一次世界大戦の時代に移行し、ナポレオン戦役への言及について検討してみることにしたい。

## ナポレオン、ヒンデンブルク、ヴィルヘルム2世——軍事的天才と戦術の科学性

『見出された時』のなかで、ナポレオン戦役と第一次世界大戦とが明示的に重ねあわされるのは、語り手「私」とサン＝ルーおよびシャルリュスとの対話においてであり、二つの異なる観点からナポレオン像が提示される。一見すると、トルストイと『戦争と平和』はプルーストにとって不可欠な触媒の役割を果たしてはいない、けれども、プルーストがここでとりあげている軍事的天才と戦術の科学性という問題の射程は、ナポレオン神話の解体を目論んだ19世紀最大の戦争小説との比較を通して、より明確になるはずである。

1914年の大戦をめぐって、プルーストの小説では、二つの対立する歴史観・戦争観が提示される。「戦争をめぐる観念が完全に覆され」、20世紀の戦争は絶対的に新しい戦争となるのか、それとも「ナポレオンの戦争が未来にも模倣され」、19世紀の戦争が反復され続けるのか<sup>22)</sup>。この後者の立場は「軍事的パステイッシュ」<sup>23)</sup>という言葉でも呼ばれる。すでに指摘されているとおり、プルーストは大戦中の新聞報道にきわめて批判的であったが、数少ない例外として『ジュルナル・デ・デバ』紙に連載されていたアンリ・ビドゥーによる戦況分析を高く評価していた。ビドゥーがドイツ軍司令官ヒンデンブルクによるナポレオンの模倣を論じているのと同じやり方で、プルーストは作中人物サン＝ルーに大戦初期の東部戦線の状況を語らせているのである（部隊の迅速な移動、陽動作戦、退却など）<sup>24)</sup>。

模範的な軍人、愛国者として描かれるサン＝ルーの言葉に、敵軍指揮官ヒンデンブルクとその先駆者であるナポレオンに対するある種の敬意が読み取れるのに対し、「敗北主義者」すなわち一種の反戦主義的な立場を示すシャルリュスは、軍事的天才への賛美とは無縁である。シャルリュスは、ナポレオンをもうひとりの敵軍指揮官、皇帝ヴィルヘルム二世と重ね

あわせることで、フランス国内の好戦的な論客の自己矛盾を批判する。戦時中のフランスでは、ヴィルヘルム二世こそが戦争を望んだ責任者であるという非難が繰り返されていた。それに対し、シャルリュスは、そうした非難をする当の人々が、じつは「四十年前」の普仏戦争敗北からずっと対独復讐を望んできた「ナポレオンの追従者」ではないか、つまり、ヴィルヘルム二世よりも以前に、彼以上に、ナポレオンこそが侵略戦争を始めた張本人として断罪されるべきではないか、と示唆するのである<sup>25)</sup>。

このように『見出された時』の作中人物の対話からは、両義的なナポレオン像が浮かびあがる。しかし、それ以上に興味深いのは、語り手「私」が、直接は戦争に関係のない話題、シャルリュスとモレルの不幸な関係をとりあげる際に、喩えとして目下の大戦とナポレオンのロシア遠征を喚起するときである。恋愛においては地位も財産も役に立たない。名門貴族のシャルリュスがどんな特権をもち、どんな特権をモレルに提供したとしても、申し出を断られれば失望を受け入れるしかない。

その場合、シャルリュス氏の立場は、ドイツ軍と同じであったろう。氏はそもその出自からしてあちらに属していたわけだが、ドイツ軍はたしかに目下進行中の戦争において、男爵がいささか嬉々として言いすぎていたとおり、あらゆる前線で勝利を取っていた。けれども勝利は何の役にも立たないのだ。なにしろ勝利のたびに連合軍はますます断固として、ドイツ軍が手に入れたかった唯一のもの、平和と和解を拒むのだから。そんなふうには、ナポレオンも、ロシア国内に軍を進めるなか、面会を求めにくるよう敵軍司令部に要求していた。けれども誰も来なかったのだ。<sup>26)</sup>

ここでブルーストはロシア遠征から汎用性の高い心理学的な説明を引き出している。同性愛者の恋愛の失敗と第一次世界大戦の長期化は、ともにナポレオンの経験をモデルとして説明されるのである。同性愛者の悲運を通し、フランスの歴史的な栄光であるナポレオンを、天敵と呼ばれ忌避されるヴィルヘルム二世と同一視することによって、敵と味方を明確に区分する戦時中の表象体系（歴史家が「戦争文化」と呼ぶもの）は攪乱される<sup>27)</sup>。

このような比較によって、1914年にドイツ軍の攻撃を受けたフランスは、1812年にフランス軍の侵攻を受けたロシア、まさにトルストイが『戦争と平和』で描いたロシアと重ねあわされることになる。ブルーストもトルストイも、小説で描いたのは自国が侵略され占領されるような戦争であ

る。そして、戦争によって脅かされるものの一つとして、故郷の村を描いている点が共通している。つまり、一世紀の距離を越え、『戦争と平和』と『見出された時』という二篇の戦争小説は、幼年時代の記憶と結びついた土地が侵略戦争によって荒廃するという主題を通じて呼応しあうのである。『戦争と平和』では、アンドレイの生家ルイスイェ・ゴールイがナポレオン軍の進路に位置づけられている。この先例が、『失われた時を求めて』のなかで当初はシャルトル近郊に位置づけられていたコンブレーの村を、大戦勃発を契機として、前線に近いランス近郊に移動させたというプルーストの選択のきっかけの一つになったと考えられるかもしれない<sup>28)</sup>。

いずれにせよ、ナポレオンという存在は、19世紀と20世紀の二つの侵略戦争を重ねあわせるための起点となり、軍事的天才（ヒンデンプルクの肯定的モデル）、軍国主義者の偶像（ヴィルヘルム二世の否定的モデル）、無力な強者（ドイツ軍およびシャルリュスの両義的モデル）という三つのイメージのあいだで揺れ動いている。ここに『戦争と平和』の遺産を見ることはできないだろうか。周知のとおり、トルストイは、ナポレオンを筆頭に、軍人の神話化を徹底的に攻撃しつづけ、戦争を決定づけるのは司令官ではなく兵士の士気であると主張した作家である。この問いを考察するには、『失われた時を求めて』第三篇『ゲルマントのほう』の駐屯地ドンシエールを舞台にした挿話のなかで、語り手とサン＝ルーが展開する戦術談義を思い浮かべる必要がある。語り手は「司令官の天才」に関心をひかれていた。

私はそれ〔司令官の天才〕がどこにあるのか理解しなかった。天才をもたない司令官ならば敵に抵抗できなくなるような、ある特定の状況下で、天才的な司令官ならばどのように行動して、危うくなった戦況を立て直すのか。サン＝ルーによれば、それは大いに可能で、ナポレオンによって何度も実現されたことがあるのだった。<sup>29)</sup>

「天才」にかかわる問題はすべて、『失われた時を求めて』の中心テーマである文学という天職の物語（どうすれば「私」は作家になれるのか、「私」に才能はあるのか）にかかわってくるはずである。ところが、このドンシエールにおける会話の続きにおいても、『見出された時』の大戦の挿話においても、この軍事的天才という問題への明確な答えは提示されない。なぜか、おそらくプルーストは、軍事的天才を定義したり、あるいは根拠の

ない神話ないし欺瞞として拒絶したりすることによって、結果として文学的天才の可能性をも破壊する危険を冒すのを避けたのだろう。そのかわりに彼は、作家を将軍に喩え、それによって、天才の謎を解くのではなく、別の問題に焦点をずらす。つまり、いったん始まった戦争や、いったん書きはじめられた作品が、当初の計画から逸れ、ある種の自律性を帯びて、予見不可能になるということを強調するのである。サン＝ルーは語り手にこう述べる。

将軍というのは、なにかの戯曲か本を書こうとする作家のようなもので、その本じたいが、こちらでは予期せぬ可能性を明らかにし、あちらでは袋小路を呈するものだから、前もって立てたプランから極端に逸れていってしまうのだ。<sup>30)</sup>

将軍について語るようなふりをして、ブルーストはここで、みずからの作家としての仕事を描いている。書くこととは、プランの実現ではなく、作品の「たえまない生成」<sup>31)</sup>に対応していく作業である。トルストイが文学から軍事的天才を追放したのに対し、ブルーストは、予測不可能性をめぐる将軍の努力を、文学作品執筆のモデルとして提示する。

とはいえ、二人の作家は、戦術の科学性を否定する点では共通している。『戦争と平和』の主人公アンドレイにとって、「戦術の科学は [中略] 存在しなかったし、存在するはずがなかった。」<sup>32)</sup> 『失われた時を求めて』の語り手は、終戦後しばらくして、ゲルマント大公夫人邸でサン＝ルーの寡婦となったジルベルトと昔話をする際、戦争は科学的でもなければ戦略的でもなく「人間的」なものであり、さらには小説的なものなのだと述懐する。

戦争は人間的なものだ。愛や憎しみのように生きられ、小説のように語られうる。だから結果的に、誰それが戦略は科学であるなどと繰り返し言い続けたところで、そんなものは全く戦争を理解する役には立たない。なぜなら戦争は戦略的ではないのだから。<sup>33)</sup>

戦争が科学の対象となりうると考える者たちの決定論的なヴィジョンとは裏腹に、戦争を完全にコントロールすることはできない。とりわけ将軍たちが、あらゆる人間と同じく、あらゆる恋人たちと同じく、相手が欲しているものを知ることができず、それどころかみずからが欲しているものを

知ることすらできないのだから——これがプーストにおける戦術談義の究極的な教訓である。戦争を理解する点では、小説は科学に勝るといっているのである。

それでは、小説のなかで戦争をどのように描けばよいのか。この問いへの答えとして、プーストは、トルストイではなくドストエフスキーを喚起する。

たとえ戦争が科学的だと仮定しても、やはり戦争を描くには、エルスチールが海を描いたように、別の方向から、錯覚や思い込みから出発してそれが少しずつ修正されていくさまを、ちょうどドストエフスキーが人生を語ったように、描かなくてはならないだろう。<sup>34)</sup>

『戦争と平和』を知る者にとって、いささか意外な選択である。『失われた時を求めて』執筆時のプーストにとっては、戦争を描くことが問題になる場合ですらドストエフスキーに地位を譲るほど、トルストイの意義は低くなってしまったのだろうか。『戦争と平和』の遺産を『見出された時』のなかに探し求めることは無意味なのだろうか。

### プーストのトルストイ的側面

このような疑念を晴らすため、フィリップ・シャルダンが提示したなかで最も有望な手がかりをここで再検討してみたい。『失われた時を求めて』においては、重要な場面で「忘我の観照」が描かれているが、「その先行モデルがあるとすれば、トルストイの小説のなかに探すべきなのは間違いない」とシャルダンは断定する<sup>35)</sup>。カイエ25の断章においてプーストがトルストイに自己同一化し、二人に共通する小説作法を、共通の敵に反論するかたちで弁明していることは先述したが、そこではさらに、20世紀後半に発展するテーマ批評を先取りするような指摘がなされていた。すなわちプーストは、トルストイの複数の小説において、比較的限られた同じテーマが「異なる装いをまとい、一新され」ながらも反復されていると指摘しているのである<sup>36)</sup>。その例として彼は、星や空を見上げる場面を列挙する。シャルダンは、まさにそのうちの『戦争と平和』の一場面、アウステルリッツの戦いで重傷を負ったアンドレイが広大な天空を仰ぐ場面をとりあげ、『見出された時』の大戦の挿話において、語り手がパリのトロカデロ付近で「広大な海のような」<sup>37)</sup>空を見つめる場面のモデル

であると指摘している。

『戦争と平和』において、限りなく高い空は、静寂と平安を宿し、はらかな永遠を思わせる。その果てしなく高い空のおかげで、アンドレイは、それ以外のすべて、彼を惑わせていたすべての空虚さに気づく。それまで彼の崇拜の対象だった敵軍の将ナポレオンが、ちょうどそこを通りかかり、救助を命じたおかげで彼は一命を取り留めるのだが、「限りない空と自分の魂のあいだで起こっていることに比べれば、ナポレオンはあまりにちっぽけで、無意味な存在に思えた」。「あの美しい、正義と善意に満ちあふれた空、彼の魂が見渡して理解したあの空」と比べれば、かつての英雄の卑小さばかりが目立つのだった<sup>38)</sup>。そして『見出された時』でもまた、空を見上げることによって、戦争の虚しさにたいする最も明白な批判が展開される。

トロカデロの塔から見下ろせる地区全体で、空は広大な海のように見えた [中略]。海はこのときトルコ石の色に染まり、気づかないうちに人間たちを押し流していく。人間たちは地球の壮大な公転[révolution]に巻き込まれながら、その地球上で愚かにも自分たちなりの革命[révolutions]と、空しい戦争とを続ける。たとえばこのときフランスを血に染めていた戦争のように。<sup>39)</sup>

大空のトルストイ的なヴィジョンが、愛国的な戦争にたいする批判と結びつけられているのは偶然だろうか。ここに1894年の『愛国心とキリスト教精神』および『戦争と平和』の反響を読み取ることはじゅうぶん許されるのではないか。少なくとも断言できるのは、この一節が「異化」の手法を用いたモラリスト文学の系譜に位置づけられるということだ。

周知のとおり「異化」とは、ロシア・フォルマリズムの理論家ヴィクトル・シクロフスキの提唱した概念であり、日常の習慣によって麻痺し自動化した知覚を再活性化させる芸術の手法を指すが、歴史家カルロ・ギンズブルグは、マルクス・アウレリウスを出発点として、モンテーニュ、ラ・ブリュイエール、ヴォルテールをへてトルストイに至る系譜を辿り直しつつ、「異化」のもつ「道徳的および社会的な批判」としての側面を明らかにした<sup>40)</sup>。異化すること、それは支配的な世界観の正統性を揺るがすことである。けれども同時にギンズブルグは、もうひとつ別の異化があると述べ、その代表としてブルーストの名前を挙げる。問題となるのは「印象主義的な即時性の経験」であり、『失われた時を求めて』のなかでは、セヴ

イニェ夫人の書簡、エルスチール（ターナーやモネをモデルとした架空の画家）の絵画、ドストエフスキーの小説という三つの例を通して主張されている手法である。この場合の異化とは、「ものごとを論理的な順序にしたがって提示する代わりに、つまり原因から始めるのではなく、まずわれわれに効果を見せること、われわれを驚かせる錯覚を見せること」<sup>41)</sup>である。このようにしてギンズブルグは、「トルストイ流の19世紀の異化」と「プルースト流の20世紀の異化」、道徳的な異化と美学的な異化とを区別する<sup>42)</sup>。しかし、戦時中のパリの空を描いた『見出された時』の一節においては、この二つの異化、二つの世紀が出会っていると言えるのではないか。なぜなら、国家間の戦争に対する「トルストイ流の」道徳的・社会的批判が、広大な海に変容した空という「エルスチール流の」印象主義的なヴィジョンとが分かちがたく結びついているからだ。プルーストの論理にしたがえば、それはまた、錯覚から描くという意味では、「ドストエフスキー流の」描写とも呼べるかもしれない。いずれにせよ、こうして戦時中の世界に対する道徳的かつ美学的な二重の異化によって、プルーストの「トルストイ的側面」と「ドストエフスキー的側面」は——スワン家の方とゲルマントの方が交わるように——つながることになるのである。

## 結論にかえて

トルストイとプルーストの作品に共通する「忘我の観照」の例はこれだけではない。本稿を締めくくるにあたり、両者の小説において、樹木の観照が、作中人物の生涯における決定的な転換点を予告する役割を担っていることを指摘しておきたい。

一つだけ例を挙げる。陽光を浴びた樹々を見る場面である。『戦争と平和』第三部、アウステルリッツの戦いから七年後、ボロジノの戦いでアンドレイは再び瀕死の重傷を負うのだが、その前夜、許嫁ナターシャの裏切りによって深く傷ついた彼は、人生の無意味さを想うと同時に、生まれて初めて、死の可能性をありありと思い描く。トルストイは、この啓示の場面のなかに、次のような白樺の描写を導入する。

彼〔アンドレイ〕は並んだ白樺を見つめた。白い木肌が、単調な色合いから浮かび上がり、陽に輝いていた。「いいだろう、俺は明日殺されるのだ。終わってしまえばよい、もう俺のことなどどうなってもかまわない。」彼は自分のいない生をありありと思い描いた。影と光に満ちたこの白樺も、あの綿雲も、野

営の火も、すべてが突然、恐ろしく不穏な気配を帯びた。<sup>43)</sup>

この「影と光に満ちた白樺」を想わせるイメージが、同じような主人公の転換点を予告するものとして、『見出された時』のなかに現れる。大戦後、国外の療養所への滞在をへて、鉄道でパリに帰ってくる途中、「田舎の真ん中の停車駅で」、語り手は「みずからに文学の才能が欠如していること」を、「かつてないほど無惨に強烈に」意識し、衝撃を受ける。そのとき線路沿いに並ぶ樹々が彼の注意をひく。

陽射しが、線路沿いに一列に並ぶ樹々の幹の半ばまでを照らしていた。「樹々よ」と私は心に思った、「おまえたちはもはや私に何も語りかけてはくれないし、私の冷えきった心にはおまえたちの言葉はもはや届かない。こうして自然のただなかにいるのに、それなのに私の眼は、冷やかに、退屈して、おまえたちの光り輝く前線と影になった幹とを分ける線を確かめているだけだ。かつて私が自分で詩人だと思いこんだことがあったとしても、今ではもう自分が詩人ではないことはわかっている [以下略]<sup>44)</sup>

いずれの場面においても、太陽を浴びて光る部分と暗い部分とに分けられた樹々の幹を目にすることが、主人公の生涯と物語の転換点をしるしづけている。樹々を前にして、おのれの生への失望が声にならない声となり、直接話法で語られる。しかし、この絶望は、どちらの小説においても、やがて新たな啓示の瞬間の訪れとともに消え去ることになる。というもまもなく二人の主人公は真の救済に遭遇するからだ。アンドレイは致命傷を負って運び込まれた野戦病院にて、『失われた時を求めて』の語り手はゲルマント大公邸にて、二人とも生の意味を発見するのである。それは、一方にとっては人類に対する憐れみと愛情であり、他方にとっては文学の力であるが、いずれの場合も、立て続けに生じる無意識的な記憶の蘇りを通して、啓示は訪れる<sup>45)</sup>。

戦争のあとに、精神的な復活の瞬間が、予期せぬ過去の回帰によって到来し、苦しむ主人公を救済するということ。空による異化と同じく、あるいはそれ以上に、この構造を『見出された時』における『戦争と平和』の本質的な残響と見なしてよいだろう。書く決意をもたらしした決定的な啓示のあと、語り手は自らの書物のモデルとして『千夜一夜物語』とサン＝シモンの『回想録』を挙げるが、彼の言い方を模倣することが許されるなら

ば、プルーストはまさに「別の時代の」<sup>46)</sup>『戦争と平和』を書いたと言ってもよい。トルストイからプルーストへの遺産目録を作成するには、ほかにも多くの手がかりが残されている。けれどもこの段階ですでに、題を組合せつつ、プルーストは彼の時代の『戦争と復活』を書いたと考えることもできるだろう。

## 注

- 1) 本稿は、2010年11月20-21日に関西日仏学館（京都）で開催された国際シンポジウム「Proust et le XIX<sup>e</sup> siècle : filiation et ruptures」における発表「Des campagnes napoléoniennes à la Grande Guerre : Proust lecteur de Tolstoï」を日本語に翻訳し最小限の修正を施したものである。
- 2) 戦時中の新聞雑誌の批判的な読者だったプルーストは、反ドイツ感情がワーグナー音楽への攻撃と化していることに憤慨し、「ドイツと戦争するかわりにロシアと戦争していたら、トルストイやドストエフスキーについてどんなことが言われたらだろうか」と嘆いている。Marcel Proust, *Correspondance*, éd. Philip Kolb, Paris, Plon, 1970-1993, 21 vol., t. XIII, p. 333. 以下、コルブ編の書簡集を参照するときは、*Corr.*と略記する。
- 3) Philippe Chardin, « Tolstoï (Léon) [1828-1910] », *Dictionnaire Marcel Proust*, sous la direction d'Annick Bouillaguet et Brian Rogers, Paris, Honoré Champion, 2004, p. 1005. プルーストとトルストイの関係については、以下も参照。Wladimir Troubetzkoy, « La relation complexe de Marcel Proust à Lev Tolstoï », *Cahiers Léon Tolstoï*, n° 9, 1995, pp. 11-18.
- 4) *Corr.*, t. I, p. 320 を参照。
- 5) Tolstoï, *L'Esprit chrétien et le patriotisme*, Paris, Perrin, 1894, p. 44, 128, 77.
- 6) Marcel Proust, « [L'Esprit chrétien et le patriotisme, de Tolstoï] », *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi de *Essais et articles*, édition établie par Pierre Clarac avec la collaboration d'Yves Sandre, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1971, p. 366. 以下、この版を参照する場合は、*CSB*と略記する。
- 7) *CSB*, p. 365.
- 8) Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, éd. Jean-Yves Tadié et al., Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1987-1989, 4 vol, t. IV, pp. 354-355. 以下、『失われた時を求めて』の引用にはこの版を用い、*RTP*と略記する。Philippe Chardin, « “[L'Esprit chrétien et le patriotisme, de Tolstoï]” », *Dictionnaire Marcel Proust*, *op. cit.*, pp. 348-349 および以下の

拙論を参照されたい。坂本浩也「賛同と超脱のあいだで——『見出された時』における戦争、芸術、愛国心」、『立教大学フランス文学』第38号、2009年、pp. 87-105.

- 9) アランの戦争論については、以下を参照。Alain, *Mars ou La guerre jugée* (1921) suivi de *De quelques-unes des causes réelles de la guerre entre nations civilisées* (1916), Paris, Gallimard, « Folio essais », 1995.
- 10) CSB, pp. 523-524.
- 11) プルーストは、トルストイの死と同年1月31日のロベール・ドレフェス宛の書簡でも、「アンドレイ公爵の頭上に広がる『戦争と平和』の広大な青空」(Corr., t. X, pp. 47-48)について語っているため、その前後にカイエ25のトルストイ論も書かれたと考えることは可能である。
- 12) « Tolstoï », CSB, p. 657 ; Cahier XXV, f°12v°.
- 13) Paul Bourget, « Tolstoï », *L'Écho de Paris*, 21 novembre 1910.
- 14) ブールジェの小説観については、ティボーデとの論争によってよく知られている。以下を参照。Michel Raimond, *La Crise du roman, des lendemains du Naturalisme aux années vingt*, Paris, José Corti, 1966, « Les métamorphoses de la composition », pp. 390-410 ; Albert Thibaudet, « Réflexions sur le roman. À propos d'un livre récent de M. Paul Bourget » [1<sup>er</sup> août 1912], *Réflexions sur la littérature*, éd. Antoine Compagnon et Christophe Pradeau, Paris, Gallimard, « Quarto », 2007, pp. 102-127.
- 15) Paul Bourget, art. cit.
- 16) Melchior de Vogüé, *Le Roman russe* [1886], Lausanne, L'Âge d'homme, 1971, p. 269.
- 17) *Ibid.*, pp. 261-262. フランスにおけるトルストイの受容については以下の論考を参照。Thaïs S. Lindstrom, *Tolstoï en France (1886-1910)*, Paris, Institut d'études slaves de l'Université de Paris, 1952 ; Michel Aucouturier, « La découverte de *Guerre et Paix* par la critique française », *L'Ours et le Coq : trois siècles de relations franco-russes : essais en l'honneur de Michel Cadot*, textes présentés par Francine-Dominique Liechtenhan, Paris, Presses de la Sorbonne Nouvelle, 2000, pp. 115-126.
- 18) CSB, p. 658. プルーストのトルストイ擁護の論法は、ロマン・ロランのそれと類似している。Romain Rolland, « Tolstoï », *La Revue de Paris*, 1<sup>er</sup> mars 1911, pp. 76-77を参照。また、以下も参照。Corr., t. X, p. 249.
- 19) Corr., t. XIII, p. 98.
- 20) Paul Bourget, art. cit.
- 21) *RTP*, IV, p. 468. 映画の比喩は、すでにカイエ57のなかに見られる。Marcel Proust, *Matinée chez la princesse de Guermantes. Cahiers du*

- « *Temps retrouvé* », édition critique établie par Henri Bonnet en collaboration avec Bernard Brun, Gallimard, 1982, p. 158 (Cahier 57, f°14v°).
- 22) *RTP*, IV, p. 340.
- 23) *RTP*, IV, p. 338, var. *a.*, pp. 1215-1216.
- 24) *RTP*, IV, p. 340 et 559, n. 3.
- 25) *RTP*, IV, p. 376.
- 26) *RTP*, IV, p. 399.
- 27) 第一次世界大戦中のドイツ軍を、ロシア遠征時のナポレオンと比較したのはブルーストだけではない。彼の友人であり、作中人物のモデルともなったジョゼフ・レナックもまた、時評記事で同じような比較をおこない、「もしドイツが勝利を確信していたら、クレムリンにいたナポレオンのように、敵が和平を求めてこないかとじれたりしなかっただろう」と述べている。Polybe [Joseph Reinach], « Esquisse d'un diagnostic », *Le Figaro*, 1<sup>er</sup> janvier 1916, repris dans *Les Commentaires de Polybe*, 5<sup>e</sup> série, Fasquelle, 1916, p. 295.
- 28) コンブレーの移動については以下の研究があるが、『戦争と平和』への言及はない。Annick Bouillaguet, « Combray entre mythe et réalités », *Marcel Proust 3. Nouvelles directions de la recherche proustienne 2*, Minard, 2001, pp. 27-44. コンブレーの破壊については、小黒昌文『ブルースト 芸術と土地』名古屋大学出版会、2009年、第7章を参照。
- 29) *RTP*, II, p. 416.
- 30) *RTP*, IV, p. 341.
- 31) *RTP*, IV, p. 619 ; voir aussi p. 331.
- 32) Léon Tolstoï, *La Guerre et la Paix : roman historique*, traduit avec l'autorisation de l'auteur par une Russe [princesse Irène Ivanovna Paskevitch], Hachette, 1884 [1<sup>ère</sup> publication : 1879], 3 vol, t. II, p. 260 (III-1-XI). 本稿では、仏訳版を日本語に翻訳するかたちで引用する。ただし、この仏訳は完全版ではなく、現在流通している版と比べると、章分けに異同があるため、括弧のなかに、完全版の部・篇・章番号を記しておく。(III-1-XI) は、第3部・第1篇・11章を指す。邦訳としては、岩波文庫版（藤沼貴訳、2006年、全6巻）を参照した。
- 33) *RTP*, IV, p. 560.
- 34) *Ibid.*
- 35) Philippe Chardin, « De la contemplation du “grand ciel” tolstoïen au dialogue critique : Proust lecteur de Tolstoï », *L'Ours et le Coq, op. cit.*, pp. 127-138, ici p. 137.
- 36) *CSB*, p. 658. この考えは『囚われの女』におけるアルベルチースを前にし

- た語り手の文学談義のなかでも『戦争と平和』との関連で示唆されるが、結局、アルベルチヌスは話をドストエフスキーに引き戻してしまう (*RTP*, III, p. 880).
- 37) *RTP*, IV, 341. Voir aussi Philippe Chardin, « De la contemplation du “grand ciel” tolstoïen au dialogue : Proust lecteur de Tolstoï », art. cit., p. 129.
- 38) *La Guerre et la Paix*, t. I, pp. 312-313 (I-3-XVI), p. 323 et 325 (I-3-XIX).
- 39) *RTP*, IV, pp. 341-342.
- 40) Carlo Ginzburg, « L'étrangement. Préhistoire d'un procédé littéraire », *À distance. Neuf essais sur le point de vue en histoire*, trad. Pierre-Antoine Fabre, Gallimard, 2001, pp.15-36.
- 41) *RTP*, III, p. 880, voir aussi II, p. 14.
- 42) Carlo Ginzburg, *op. cit.*, p. 32, 34.
- 43) *La Guerre et la Paix*, t. III, pp. 19-20 (III-2-XXIV).
- 44) *RTP*, IV, p. 433.
- 45) *La Guerre et la Paix*, t. III, p. 68 (III-2-XXXVII).「この恐ろしい苦痛[手術]のあと、アンドレイは言葉にできない充足感をおぼえた。自分の人生でいちばん心地よかった瞬間が目の前を横切った。とりわけ子供時代の、服を脱がされて揺りかごに寝かしつけられたときのこと、ばあやが子守唄を歌ってくれたときのこと。自分は生きていて感じて幸せだった。しかもこうした過去すべてが現在になったように思えた。」そのときアンドレイはかたわらに、アナトール・クラギンの姿を認める。かつてナターシャを誘惑した男が、足を切断され、泣きわめいている。「すると突然、愛と清らかさに満ちたあの理想の世界の顔のように、ナターシャが目の前にたち現れた。一八一〇年の舞踏会ではじめて見たときのままの姿で、細長い首と手をして、輝くばかりに晴れやかで、怯えたような、今にも興奮しそうな顔をして……。そうすると彼女に対する愛情と思いがこれまでにないほど強く生き生きと呼び覚まされた……。そのとき彼は、この男と自分のあいだに存在する絆を思い出した。涙で潤み、赤くなった男の眼は、彼のほうに向けられていた。アンドレイはすべてを思い出した。すると、情愛深い共感の念が、彼の歓びにあふれる心を買いた。アンドレイはもはやこらえきれず、愛情と憐れみの涙を流し、人類と、彼自身と、彼自身の弱さと、この不幸な男の弱さを思って悲嘆にくれた。『そうだ、これが憐れみだ。隣人愛だ。われわれを愛してくれる人々にもわれわれを憎む人々にも注がれる愛、神が地上で説き、マリアが俺に教えてくれたのに、あの頃の俺は理解していなかった……。これこそが、俺がまだ人生で学ぶべきだったことだったのだ。死ぬのが惜しいのはこのせいだ……。しかし俺は感じる、今は

もう遅すぎるのだ。」見てのとおり、『戦争と平和』においては、贖罪の瞬間は死が避けがたくなったときに訪れるが、『失われた時を求めて』においては、迫る死と闘いながら作品を書きつづけていく決意が示されるという違いはある。

46) *RTP*, IV, p. 621.